瑠璃色の奴隷

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瑠璃色の奴隷

【Ｎコード】
Ｎ２８９７Ｍ

【作者名】
川中流一

【あらすじ】
時代は明治、舞台は貴族が世統べる平行日本。日本に輸入された奴隷制は独自の形態を遂げていた。それは『扇子』と呼ばれる少女達。最高貴族のとある男は世にも美しい『扇子』を手に入れた。――それは物であって人ではない。

＊縦書き読み推奨

一・扇子

「いらねぇよ」
「いるのだ。これだけは従ってもらうぞ」
壮年の男は少しため息をついた。この息子に説得するのは骨が折れるだろう。
「お前の問題ではない。霧崎家次期当主として形だけでも持っていなければならないのだ」
「阿呆くせぇなぁ」
ため息をついたのは息子の方も同じだった。そんな父子の問答を見ていた老父が白い顎鬚を撫でてふぉ、ふぉ、と笑う。
「なんだ…じじぃ」
「まぁ見てから決めれば良かろう」
そう言ってパンパンと手を叩くと、部屋の片隅に控えていた初老の執事が頷き部屋を出て行く。
「お前の目に適うものを見つけるのにこうも時間がかかってしまった。なに、その分存分にわしに孝行を返すとよい」
「うぜぇなぁ、うぜぇよ。女ならともかく何が悲しくてガキを連れ回さなきゃなんねぇんだ？」
「悲しむべきは高貴さよ。しかし卑しき身とはいえ、どうして中々小間使いというのは便利なものじゃよ」
コンコンと音が聞こえ、ギイと重厚な扉が開く。執事の後ろから少女がしずしずと入ってくる。壮年の男も若い男もそれを見て一瞬目が止まった。老人はにこにこと満足気にその様子を見ている。
「――なんだ、こいつ」
淡い空色の瞳に銀髪を垂らした少女からようやく目を外して男は言った。それにつられてはっとしたようにその父親も老父を見る。
「お前の『扇子』じゃ、千次や」
「…おい、密輸入じゃねぇだろうな。こんな目立つ物手元に置いた

らすぐにばれるぜ」
「割りに合わんことはせんよ、わしは。歴とした経路で手に入れたのじゃ。驚くのも無理はない、『扇子』としても法外の値がついておった。しかしこれを見て買わない訳にはいかないじゃろう、可愛い孫の為にな」
「…どうすんだよ、これ。俺がいらねぇっつったら」
「ふむ、引き取り手は数多じゃろう。まだ未使用じゃしな」
老人は顎を撫でた。少女は耳などついていないように無表情のままだった。
「どうするんじゃ？千次」
若い男はちらりともう一度少女を見ると面白そうに口端をあげ、老人を向いた。
「もらおう」

「お前、名は？」
無言で後ろを付いて来た少女に自室で初めて口を開いた。
「るりです」
「ほぉ、『瑠璃』か。――いい名だ」
男は懐中から扇子を取り出して群青のそれをはらりと開き差し出した。
「お前は俺がもらってやろう、瑠璃」
「はい、御主人様」
少女は無表情のままこくりと頷くと、それを両手で受け取った。

二・遊戯

「なんだ、なんだ。見せびらかしにきたのか、霧崎」
「ああ。その為にこいつらがいるんだろ？」
ぐりぐりと胸までもない銀の頭を撫でる。精巧な氷細工のようだと、見せられた男は思った。冷気に当てられるような、凍りついた美しさだと。だが平常を装って言う。
「近年はその傾向だな。機能よりも見た目で高値がつけられる。それにしても流石は霧崎家様だ。今まで連れなかったのは御眼鏡に適わなかったということか」
「――いつからこんな下らない風習があるんだろうな」
「奴隷の身で美しく生まれた娘を憐れに思って扇子持ちに使ってやったのが始まりらしいぜ。それが身の回りの世話もとより、今じゃより美しいのを連れるのが貴族の格付けになった」
「それにしてもまだガキみてぇな女しか見たことがないな」
「数年で処分されるからな。仕方ない、情報漏洩を防ぐ為には」
「少女、なのが何でか聞いてるんだよ」
「そりゃぁ都合がいいからだよ、色々とな。名門家の次期当主のくせにそうも貴族の常識が欠けていて大丈夫なのか」
「興味なかったからな」
「今は興味あるのか？」
にやりと笑った悪友に同じく笑い返す。
「ああ、あるぜ。――面白い。奴隷っていうのは皆こういう風なのか。まるで人形だ」
男は一寸少女に目をやるが、先ほどからぴくりとも表情は動いていない。とても淡い水色の眼はどこを見ているのだろう。顔立ちは狂いなく造られたようで、生身の人間にしては不自然な程整いすぎていた。これは等身大の人形だと誰もが思うだろう。
「いずれにせよモノだぜ、『扇子』はな。――幾ら人間の形をして

いても」
「ふーん」
男はつまらなそうにとも面白そうにとも判別のつかない様子で相槌を打った。

広げられた布に男がほぉ、と言うと平伏していた店主は嬉しそうに心持ち頭を上げた。
「花房草安の作でございます。この深藍は未だ染め法が不明で本来は値の付けられない逸品中の逸品でございます」
「もらおう」
「はっ、では早速着物をつくらせましょう。いつもの御寸法で？」
「いいや、今回はこいつの着物をつくってもらう」
男はちら、と半歩後ろに目を遣った。
「霧崎様、無礼ながらそちらの御方は…」
「小間使いだよ、可愛いだろう。俺のものなら身なりを整えてもらわないとな」
店主は言い難そうになにか口ごもり、あー、という音になった。
「なんだ？」
「霧崎様、当家は代々御貴人のお召し物を作らせて頂いており、特にこちらは当店に代々伝わるものでして普段は蔵で保管しており…」
「はっきり言え」
「は、はい…その、霧崎様にお召しになって頂くのであれば名誉なことではありますが、」
店主は顔を畳にこすりつけるようにして一気に言った。
「当家の名にかけて奴隷の衣にはできませぬ」
こおん、と庭の竹水が鳴り、男はふ、と笑うと静かに言う。
「お前の代で店閉まいじゃ名も何もないだろう」
「霧崎様、どうかどうかご容赦を…！」

「そうだな、お前のとこには世話になってるしなぁ」
男は庭のつつじに目をやる。
「よし、」
「は、」
「品評会に出すものをつくれ」
「――そういうことでありますならば喜んで承らせて頂きます」
「頼んだぜ」
「はっ、恐れながらこの花房の家紋にかけて霧崎様のご期待に必ずや応えましょう」
「ああ、期待している」
「して御寸法は」
「そいつで測れ」男はくすり、と笑って流し見た。
「じゃぁ瑠璃、俺は待っているからな」
男は立つ。
「店主――俺のものだということを忘れるなよ。丁重に扱え」

男は馬車の停めてあるのを通り過ぎながら執事に声をかけた。
「おい、歩いて帰る」
「かしこまりました。お気を付け下さいませ、若様」
付き人もなく街を歩くなど、とこれについてはとうの昔に問答済みであった。それよりも、その半歩後を歩幅に遅れないようにとついて行く、最近屋敷に入って来た『扇子』に目を眇める。
「待て、奴隷。何故若様の荷物をお持ちしない」
その声音にびくりと少女は止まった。
「うるせぇなぁ」
「ですが若様、」
「ほら、持て。瑠璃」
「はい、御主人様」
両手を差し出し小包みを抱える。

「言われなければ気の利かないというのは幾ら奴隷とはいえあまりにならない。側に置かれるのならば私に教育させて下さいませ」
「教育か…それもいい」男は愉しげに笑う。
「ところで、川野」
「はい」
「奴隷じゃねぇ。『瑠璃』だ」
「若様――はい」
「呼んでみろ、俺のものだってことをよく考えてな」
執事は少女を見下ろし諦めたように小さく息を吐き出した。
「……るり様」
「他の奴らにも言って置けよ、二度はないからな」
男は笑い、歩き出した。その後を少女は従いていく。
「大器でいらっしゃるが…お遊びが過ぎる」
行ってしまうと、背中を見つめ執事は聞かれないようにまたため息をついた。

「それで、お前習わせてるのか。茶の手前や書を」
「ああ。読み書きすらできなかったが、中々覚えがよくてな。今もやらせている」
「へぇ、ものを覚えるものか。でも意味ないだろう。一体何の為にだ」
「面白いからだ」
「お前の愉しみは良く分からんなぁ。使用人もさぞ呆れているだろう、お前の道楽には。まぁ、女遊びが程ほどになっただけでも霧崎家には収穫か」
「そうだな、暫く忘れていた。帰りに女郎に寄っていくか。お前もどうだ？」
「全く…ではご一緒させてもらいますか、色男の引き立て役に」

「何言ってやがる」
男達は笑って立ち上がった。

「なんだ、瑠璃。全然進んでいないな」
男は墨で書かれた文字を覗いて言った。
「どれ、俺が見てやろう」
そう言って上から筆を持つ手を重ねるとすらすらと流れる文字を書いた。
「やってみろ」
少女も筆を動かす。
「ほら、できるじゃねぇか。――お前、さぼっていたな？」
こん、と額を小突く。
「お手伝い、してました」
「手伝い？いいんだよ、お前はしなくて。それよりも早く習いを覚えろ」
「はい、御主人様」こくん、と少女は頷いた。
「もう日取りを決めちまったからな――楽しみだ」
彼は何か企むように笑って少女の髪をさらりと手で掬った。

三・巡合

「けれど、御主人様に、」
「奴隷の分際で口答えする気？誰が口を開けていいって言ったの。来なさい」
「どうして千次様はこんな出来損ないを…顔だって気持ち悪いわ、人形みたい」
滑らかな髪を引っ張るようにして大量に溜まった食器の前にどん、と背を押した。
「洗いなさい」
「このあいだは若様がお帰りになる前に終わらなかったでしょう？感謝しなさい、仕事を覚えさせてあげるんだから」
「大体奴隷がお茶の作法なんて生意気なのよ。仕事もろくにできないくせに」
くすくす、と女中達は笑う。
「でも折角のお着物が汚れちゃうわ」
「そうね、千次様がお知りになったら困るし」
「脱げばいいのよ」
「ああ、名案だわ」
「価値も分からない奴隷が、私達だって着られない代物なのに不相応も甚だしいのよ」
女達は近づきぐい、と襟を、帯を掴む。少女は身を縮こまらせた。
「大人しくしていなさい。声をあげたら承知しないわよ」
「だめ」
「――何ですって？奴隷が人間に刃向かう気？」
「御主人様の…」
少女は頑なに身を縮こまらせた。その様子に一人が平手を高く上げる。
「目障りなのよ！人間もどきが！」

少女は咄嗟に目を閉じたが、痛みはやってこなかった。
「何してるんだよ、お前ら！」
そこには少年がいた。
「竜之助…」女中達が取り繕うように少女から離れた。
「瑠璃様じゃないか。お前ら、こんなことをして済むと思っているのか！」
「別に私達は、仕事を教えてあげようとしてただけで…」
「行けよ。次は見逃さないからな」
少年が気迫のこもった声でそう言うと女中達はぱたぱたと行ってしまった。
「瑠璃様、お怪我はありませんか」
こくんと少女が頷くと、少年はばっ、と頭を下げた。
「瑠璃様…今のこと決して許されることではありませんが、どうか今回だけはお見逃し頂けないでしょうか。二度と瑠璃様にご無礼はさせません」
こくんと少女は頷く。
「有難うございます、瑠璃様」
少年は顔を上げてぱ、と笑ったが、今度は少し表情を暗くして話し始めた。
「あの者達は、下級とはいえ貴族の娘なのです」
「昨今は没落してしまう貴族が多いでしょう。その子息や令嬢は名門家に仕えることも多いのです。この霧崎家に仕えたいという者は後を絶たない。――とくに、御令嬢は」
少年はそこで少し微笑む。
「若旦那様は御教養深く端麗で万につけ優れた方でいらっしゃる。――ですから常に若旦那様の傍で仕える瑠璃様にきっと嫉妬をしたのでしょう。特に若様は今まで身の回りのことも使用人を使わず御独りで済ませてしまわれていましたからね」
我々使用人としては困ったものです、と言いながらも声音はどこか誇らし気であった。

「奔放と言われますが、何事につけ御自身で判断されるお人なのです」
彼の言葉の端々からは自分の主を心から敬い憧れすら抱く念が垣間見えた。しかし心持声を低めて言う。
「――ですが許せない事に対しては徹底して厳しい面がおありだ。霧崎家から暇を出されたとなればもう実家に帰るどころか貴族社会に居場所はありません。行き場を失い自害かあるいは……」
少年は憂うような表情をしたが、すぐにきり、と顔を戻した。
「お時間を取り申し訳ありませんでした。お部屋までご案内させて頂きます」
「大丈夫…」
少女はそう言うと、とたとたと着物に慣れない様子で歩いていく。どうやら少し急いでいるようだった。

「瑠璃、どこまで行ってたんだよ。迷っていたのか？」
「お台所です、御主人様」
「で、珈琲は？」
「…持ってきます」
くるりと振り返ろうとしたが、手を押えられる。男は軽いため息をついた。
「もういい、時間だ。行くぞ」
そう言って立ったが、彼は少し眉をひそめた。
「なんだ？着崩れてるぞ」
一寸かがむと少女の襟元をただす。
「ものには造り手の心ってものがあるんだからちゃんと着てやるのが礼儀だろう。――今度着付けも教えてやるか」
帯を結び直すと、男はよしと言って赤い珊瑚のかんざしを銀髪に挿した。

「今日はお前のお披露目だ。茶の飲みかたは大丈夫だろうな？」
「はい、御主人様」
「驚くぜ、あいつら――」
少女は満足気に笑った男の顔を見上げた。

挿話・相傘

茶会の後ザアザアと鳴るのを聞きながら渡り廊下を歩いていると庭先に蒼い着物を着た少女が見えた。雨だというのに傘も差さずに突っ立っている。奇妙なのは傘を持っているのに差さず屋根も近くにあるのに入らないことである。

「お前…何やってるんだ？」

男は呆れたように少女の手から濃紺の傘を取りそれを差した。銀の髪から滴が落ち続け、着物もずっしりと濡れていて重そうであった。

「御主人様を待っていました」

「確かに待ってろとは言ったが、一歩も動くなとは言ってねぇ。それも傘も差さないなんて、馬鹿としか言いようがねぇな」

「御主人様の傘です」

「はいはい。融通が聞かねぇなぁ、お前も」

男は傘を持とうとする少女の手を除ける。

「風邪を引いたらどうするんだ。お前の体は俺のなんだから、もっと大事にしろよ」

「はい、御主人様」

男は苦笑して、もっと入れと言って歩き出した。

＞i１０７１８｜１３３１＜

四. 葉桜

「流石、霧崎様の御扇子ともなると格が違いますな」
「茶に書のたしなみ、なにより美しい。佇まいになんともいえない趣がある」
「そうだろう」男は満足気に口端をあげた。
「いや全く、奴隷とは思えない」
ちらり、と男に見られて彼は身をすくめた。なにか気に障ることを――
「いや、申し訳ない。霧崎様のお持物を奴隷などと――」
「いいや、いい」男は手の扇子をくるりと玩んだ。
「奴隷は奴隷だ」

（あ、）
少女はこの間に会った少年を見かけ、ぱたぱたと走った。
「瑠璃様」少年は笑顔になった。
「竜」
「はい、瑠璃様」
「…りゅう？」
「はい？」
「りゅう。るりのこと、覚えてない？」
少年は一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに微笑んだ。
「どなたかと似ているのでしょうか」
「りゅう、嘘吐きになった」
「……」
「りゅう、変わった。だけど、りゅうだ。本当にまた会えた。？じゃなかった」

「…るり」少年はそう呟いた。
「りゅう、幸せはあった？」
「瑠璃様、確かに私達は以前に出会ったことがあります。しかし、ここではそれはお隠しになった方が宜しいでしょう」
「りゅう、なんで？」
少年はもう笑顔を消し押し黙った。
「――分かった。るり、りゅうの邪魔しない」
「瑠璃様？」
「るりは、奴隷だから」
「違います！」
「違う…。瑠璃様、違うんです。あの方は、立派な人だ。全てを成し遂げる。ですが目的には手段を選ばれない方でもあります。貴女様のお命はあの方のもの…私のような者に近づくことは瑠璃様のお立場を危ぶめるのです」
「分かった。でも、るりは『様』じゃない。昔みたいにして」
「瑠璃様…」
「るり、一人だった。りゅうに会いたかった」
少女は空色の瞳で少年を見上げる。視線を逸らせずに彼は耐えきれない表情になった。
「――るり…ごめんな、昔はよく笑っていたのにな。辛いこと、たくさんあっただろう」
少年は少女の頭を優しく撫でた。

老人は懐の扇子を開き金箔の桜を眺める。暫く何か想い出すように耽っていたが、一度眼を瞑り漸く呼び出していた孫に目を遣った。目を開けた時にはいつも通りにこにことした好好爺であった。孫は別段何も言わずに窓外のとうに散った桜の木を見るともなしに見

ている。
「千次や、どうかね近頃は、」
声に男は目を戻しふ、と笑った。
「お陰様で、上々だ」
「お前の扇子がどこに行っても専ら評判になっているが」
「至極暇で狭い世界だからな」
「扇子を持つのが流行って売買に拍車がかかっとる。中流まで持つようになる始末じゃ」
「俺のせいだと言いたいのか」
「奴隷に読み書きを習わせた者はいたが、貴族のたしなみまでやらせたのはお前が初めてじゃろうな。賛否両論だが、若者は我もとお前の真似をし始める」
「回りくどい言い回しはよせ、説教の時くらい」
「霧崎家は貴族の頂にして鑑――社会の秩序じゃ。自分の影響力をゆめゆめ忘れるでないぞ」
「はっ。じじぃ、お前の意図に乗ってやったんだぜ？奴隷制度に不満があるんだろう」
「孝行な孫で結構じゃ。しかし、ちょっと予想以上になった」
「確かにな」くすりと男は不敵に笑う。
「意図と女は裏切るから面白い」
ふぅ、と老人はため息をついた。
「千次や、明後日の納涼夕宴には必ず出るんじゃぞ。それがお前の務めじゃ」
「分かっている。――来るんだろう、あいつが」
「そうそう、分かっているのなら善し。そろそろ遊びは終いじゃ」
老人は扇子をぱたりと閉じて懐中に閉まった。

五．硯夜

「千次様。お久しゅうございます」
「ああ、久しいな、えりか」
「今晩の晩餐はとても楽しみにしておりますわ。お話したいこともたくさんありますの」
「ん、晩餐？」
「ええ、お祖父様が招待下さって――お聞きになってらっしゃいませんか」
「困ったな。今晩は友人に相談を頼まれている」
「え、千次様――」女は男を見た。
「――分かりますわ、ご友人を大事になさって下さい。えりかはまたお誘い頂けるのを楽しみにしております」
「悪いな。理解のある女は好きだぜ」
女は頬が染まったのが恥ずかしいように俯いた。

「――で、誰がお前に相談を頼んだって？」
「聞いてやがったか」
「そりゃぁお前、一昔前からの旬な話題に見ざる聞かざる言わざる者こそいないぜ。というか一体いつまで婚約しているつもりだ？美人・聡明・皇族まさに完璧を絵に描いて金箔を貼ったような才色兼備、唯一の欠点と言えばお前なんぞに惚れているようなところだ。だが自惚れるなよ、籠の中の御姫様だから水膨れ程度の火傷をしてみたいだけに決まっている。嗚呼畜生、さっさと婚儀をあげちまえ」
「いい体してるんだけどな。面倒そうな女には手を出さない主義だ」
「お前は馬に蹴られて死ぬといい」
「いいよなぁ、跡継ぎしない奴は自由で」
「甚だ遺憾だ。まるで自分は自由じゃないような口ぶりじゃないか」
「俺は一線を見極めている。狭苦しい綺麗な庭の中で遊んでるんだ

ぜ？」
「それにしてはお前、近頃はめっきり夜遊びに誘わなくなったな。今まで散々に俺に堕落の烙印を押し付けてきたくせに」
「最近はあれにものを覚えさせるのが楽しくて仕方がねぇ」
「そうだ、そうだ。俺も扇子を持ったんだ。確かにいいものだ」
「ほぉ、見せてみろよ」
「よし、じゃあ折角だし見せあおうぜ。お前の評判の扇子、是非拝見したい」
「いいだろう。しかし俺のに敵うものはないぜ」
「そうか？」
「随分自信があるな」
「俺のも二つとない代物だ、衝動買いだ、寂しさよ、友の居ぬ間の扇子かな」
「いぬ吠え遠くに扇ぐ夏の夜――後で吠え面かくなよ」
「ふっふっふっ。楽しみにしたまえ」
「さて、そろそろ御姫様は帰ったかな」
「なんだ、もう帰るのか」
「気になるからな、『扇子』が手元にないとどうも落ち着かねぇ」
「心配するな、お前のものに手を出す奴はいない」
「だが可愛いものは苛めくなるだろう」
「それはお前の思考であって一般ではないから安心しろ」
「全く、公式の場に扇子は持ちこめないてのはおかしいよな」
「まぁどっちにしろ婚約者の前には普通持っていかないな。『扇子』の役を考えれば」
「扇子持ちが何故いけない」
「お前、嘘だろ？」
「何がだよ。お前が言っていたんだろう」
「それは表向きだ。かわいいところあるよなぁ、お前も。腐っても名門家の御子息様だもんな、純粋だ」
男は黙して友人の首を絞めた。

「うっ…やめろ。悪かった！調子に乗った！」
男が手を放すとげほげほと咳をする。
「手加減しないのがお前の恐いところだよ、親友に対して！」
「いいから話せ。なんだよ、まさか監視役か。じじいが考えそうなことだ」
「えー。本当、言いたくないな。というか聞かなくてもそういうものだろ」
「お前…俺を馬鹿にしてただで済むと思うなよ」
「分かったって！早い話が、つまり、その――」

部屋に入ると少女がぱたぱたと走ってきてぺこんとお辞儀をした。
「お帰りなさいませ、御主人様」
「おう」
男はソファに腰を下ろした。少女はお茶を淹れている。
「瑠璃、」
「はい、御主人様」少女はことんと緑茶を置いて答えた。
「お前の役割はなんだ？」
「御主人様のお役に立つことです、御主人様」
「――そうか。今日はいい子にしていたか」
「はい。文字の練習をしていました、御主人様」
「見せてみろ」
「はい」
少女は紙を持ってきた。あかさたな…と丁寧に書かれた文字が続いている。
「よしよし、上手くなった。そろそろ漢字だな」
「はい、御主人様」
「今日はもう寝ていいぞ。寝床に行け」
「はい。おやすみなさいませ、御主人様」

ぺこりと礼をして少女は歩いて行った。
「役に立つ、か…なんとも曖昧な表現だ」
ずず、と男はお茶を飲んだ。

月を仰ぐ。暗い部屋の広いベットでごろんと横になっていた。

『情欲処理だよ』

『考えてもみろ。結婚をしていない貴族の男が奴隷とはいえ選りすぐった十四五六の娘を所有しているんだ』
『貴族様っていうのは普通は大っぴらに夜遊びなんかできない、上流な程な。とはいえ男は男だ。だから手元に置いておくんだよ』
『大概奴隷には父親も名字もない。分かるか？奴隷の女がどうやって生きるか。特別美しく生まれれば綺麗な格好をして食べ物にも困らない。それが奴隷に生まれた女の夢だ、俺達貴族の人形になるのがな。――例えどれほど儚き花の命でも』
『お前が女で遊ばなくなったからてっきりそうかと思ったんだが、成程な、だから手習いなんて発想ができたんだ。あれはただ人に見せびらかす為じゃない、もっと実用的な用途で在るんだよ』

「――ちっ…」
男は起き上がり、部屋の隅の小さな扉の小さな部屋の小さなベットを見下ろした。すやすやと寝息が聞こえる。眠った顔の方がまだ表情があり人間と変わらずに見えた。照らす月灯りの窓の下、桐の文机の上の黒い塊にふと目が止まった。よく見るとそれは丁寧にたくさん重ねられた紙で、しかし小さな文字で埋め尽くされていた為に白い部分はほとんどなかった。離れたところに、自分の書いてやった手本が綺麗な状態である。
男はもう一度舌打つと、その黒紙も自分の書いた文字もぐしゃぐ

しゃと丸めてそこを出た。乾いていない墨が手に付く。
「何が、夢だ」
――笑った顔など一度も見たことがない。

六．燻火

「お前、また女遊びに耽ってるらしいな。前より酷いらしいじゃないか。えりか様が泣くぞ」
「うるせぇよ。俺に口出しするな」
「全く…俺が責任感じるだろ」
「取れよ、責任。つまらねぇ、前よりもっとつまらねぇ」

「竜、やくそく、覚えてる？」
「――忘れたことはないよ、るり」
「でもるり、もうすぐいなくなるかもしれない」
「…いなくなる？」
「御主人様は、多分るりに厭きたと思う」
少年は言葉を失った。――こんなに平然と、自分の命を知っている。自分の命を大切に思って欲しいなんて言うのはどれ程残酷なのだろうか。
「そんなことはないよ。今は琴を習っているんだろう？ずっと音色が聞こえてくる。思わず聴き込んでしまうよ」
「うん、ずっと弾いてる。御主人様は従いてこなくていいと言うから」
「――るり…」
思わず抱きしめそうになった腕を少年は押えた。
「大丈夫だよ、るり。大丈夫だ。俺は約束を守る」
「うん」
少女は小指を差し出した。少年は微笑んで、小指を絡めた。
「やくそく」

「どうだ、かわいいだろ？」
「…お前は妙な趣味があるよな、二流品を好む」
「二流だとさ、ちよ」
「うちそんなん言われたん初めてや。奴隷やからって舐めないどいてくれます？そこらの貴族さんよりうちのほうがずっと綺麗やわ。なぁ、御主人」
「おいおい、そこらにしとけよ、ちよ。このお兄さんは怒ると恐いんだぞ」
「訂正しよう、最早価値は付けられないな、逆の意味で。というかお前本当にこれ、どうした？」
「いいだろう、自棄も手伝い買っちまったんだがやはりものの良さは使ってみないと分からないものだな。意外や俺もはまっちまった」
「お前は奇抜好きだからなぁ」
「お前は綺麗物好きだよな、完璧に整ったものこそが美しいと思っているだろ」
「ああ。やはり俺のが一番だな」
男は隣に座らせた少女の銀髪を手に取って遊んだ。
「…それ、人形ちゃうの？気味悪いわぁ、さっきから表情さえ動いてないで」
「おい、お前のそれは本当に奴隷なのか？扇子にしてはわきまえが無さ過ぎるぞ」
「あれは不良品です、御主人様」
少女の鈴のような声が鳴り、一同が全員その出所に注目した。
「ははっ。だってよ、光次郎」
「へぇ、お前のも言うなぁ」
二人の男は面白そうに笑う。
「御主人！酷いわぁ、ちゃんとなんとか言い返してくれへんの」
「悪い、悪い。俺にとってはお前が一番可愛いよ」

「そんなんはっきり言われたら照れるわ、御主人、もう」
小麦色の肌を少女はぽっと染めて隣の男の腿をぱしんと叩く。
「はは、どっちだよ」
「…随分と扇子と仲がいいな、お前は」
「なんだ羨ましいのか、羨ましいんだろ、千次？」
「阿呆か。――所詮、動く人形だろ」
無表情な少女の顔を見やって、男は頭を撫でた。
「可哀そ。だからそんな無表情ちゃうん？うち、御主人にもらわれてよかったわぁ―。売れ残されてな、殺されそうなところやってんけど」
「俺なら殺してるな。お前のものだから見逃しといてやるが」
「おおきに」男は笑ってくすくすと少女と顔を見合わせた。その様子に呆れた様に男は微かに首を振った。
「可哀想な男だな、現実の女から逃避してそんなもので誤魔化しているとは」
「黙れ黙れ俺には癒しが必要なんだ、絶対に俺を傷付けずお前に取られる心配もない――て何を言わせるんだ。俺だってモテる方だぞ、お前さえいなければ」
「なら独りで遊べよ。そもそも好かれる必要などないだろう、必要なら買えばいい」
「可哀想な男だな、可哀想な男だな。まぁこれ以上は言わないで置いてやろう、惚れたところで好きな女とは一緒に成れない身だもんな」
「口が過ぎるぞ、光次郎」
「失礼致しました、千次様」隣の小麦色の少女があははと笑う。
「――帰る。つまんねぇ」男が立つと少女も立ち上がる。
「はっはっ、妬け妬けざまぁ見ろ」
「お前、ばかだろ。奴隷だぞ、それ。変な感情を持つんじゃねぇよ」
「それは俺に言ったのか？」
「他に誰がいる」

「お前、とか」
「――お前、もう俺の前に顔を出すな」
男はそう言って、大股にその部屋を出て行く。銀の髪の少女も慌てて従いて行った。

七. 琴線

「瑠璃、欲しいものはないか」
「ありません、御主人様」
「なんでも手に入れられるぜ」
「――ありません、御主人様」
「…そうか」
男がつまらなさそうに懐から扇子を取り出すと、少女は受け取りぱたぱたと男を扇いだ。
「そうだ、洋服をつくらせたんだ。お前の衣装棚に入っているから、適当に選んで着替えてきてみろ」
「はい、御主人様」
少女は寝る場所の数倍広い部屋に向かった。着たこともない服がずらりと掛けられて並んでいる。その一つを手に取った。

「へぇ」
白いレースのふんだんに使われた、青いストライプのエプロンワンピース。流石に良く似合っていると男は思った。
「午後からお茶会、て感じだな。――瑠璃、二人分の紅茶と茶菓子をテラスに用意しろ」
「はい、御主人様」

かちゃりとティーカップを置いて少女が生クリーム添えの抹茶のシフォンケーキを口に運ぶのを見た。
「ケーキは好きか」
「はい、御主人様」
「俺のも食え」男は少し微笑んで皿を前にやった。
「はい、御主人様」
さわさわと鳴りながら葉が緑の影を作っていた。

「俺は、何をやっているんだろうな」
銀髪が風に揺れる影を見て、彼は独り言をした。
「人形遊びにうつつ抜かしているのは現実逃避か」
男が席を引くと少女もフォークを置いた。
「お前は食い終わってからでいい。片づけもそのままにしておけ」
「はい、御主人様」

間もなく少女がやってきて傍に立った。
「瑠璃…琴を聞いてやる」
「はい、御主人様」
少女は楓の白琴を取ってくると畳の間に置いて正座した。男は紡がれる雅楽に目を閉じる。
「もういい」
音が止むと彼は黒い紫檀琴を持ってこさせた。
「連弾させてみよう。やったことはあるか」
「ありません、御主人様」
「そうだな、独りで練習していたんだよな。――お前は好きに弾いていい。俺が合わせよう」
「はい、御主人様」
男は向かいに置いて、少女の白い指が弦を弾くのと同時に弾き始めた。その調べは儚く美しく哀しかった。もし聴く者がいたら心の線を弾かれてつつと涙を流さなければならなかっただろう。――だが黒白二つの琴が濡れることは決してなかった。
やがて男が指を止めると少女も指を弦から離した。
「来い、瑠璃」
男は少女を傍に座らせると膝上に頭を置き横になった。
「瑠璃…ひと月後に俺は婚儀を挙げる」
扇子で風を送る少女の顔を見上げる。
「そうしたらお前は廃棄だ。――それが決まりだからな」

「はい、御主人様」
少女は相変わらずの無表情だった。
「お前はそれしか言わねぇな。あいつのはよく喋るし笑うのにな」
「御主人様、扇子は笑わないものです」
「へぇ？」
男は口端を上げると突然に少女の体をくすぐり始めた。しかし依然として少女は顔の筋肉を微動だにさせない。耐えている様子もなく身を捩ることも無くされるがままに為っている。
「――全く、これじゃ俺が馬鹿みてぇだな。しかし本当にどうなっているんだ？お前は」
「るりは上等品なのです」
「今、本当はどんな気持ちなんだ？」
「扇子は気持ちを持ちません、御主人様」
「嘘だろう？――奴隷だって結局は同じ人間じゃねぇか」
「いいえ、御主人様。奴隷は人間ではありません」
「なぁ」
「はい、御主人様」
「お前は生まれた時からそうなのか」
「るりは生まれた時から奴隷です」
「違う。お前はここにくるまでどうやって生きてきた？」
「最初は子供の奴隷がたくさんいる場所にいました、御主人様。それからるりは選ばれて別の場所に行って、扇子になる躾を受けました。途中でしたが御主人様のお祖父様の気に入って、買って頂きました」
「躾って、どんなだ？」
「それは言えません、御主人様。決まりです」
「言えよ。大丈夫だ、俺のものに手は出させねぇ」
「あの場所の皆が罰を受けます」
「――想像以上に最悪だな。」
「けれど扇子が高く売れたらそれで皆はよい食べ物が食べれます。

るりは上等なので皆いっぱい食べれたと思います」
「お前、それはどこだ。俺がなんとかしてやろう」
「言えない決まりです、御主人様」
「瑠璃…」
男は少女の顔におもむろに手を伸ばし頬を撫でると、押し倒して片手を握った。
「可愛がってやる」

八．涙川（前書き）

情表現を避けたい方は本話を飛ばしてお読み下さい。

八. 涙川

ワンピースを脱がせ、白いブラウスのボタンを外すと白磁の肌が露わになった。
「御主人様…？」
鎖骨に舌を這わせると、少女はびくりと震えて困惑した表情で見上げた。
「可愛いな。表情、変えられるじゃねぇか」
首筋をつつ、と舐める。「あ、」と吐息を上げてしまってすぐに唇を引き結んだ。
「いいなぁ。今の声、もう一回出せよ」
「御主人様は何をしているのですか…？るりは何をすればよいですか」
「なんだ、何も知らないのか？」
「…？――るりは、しつけの途中で買われました。知らないこと、あるかもしれません。けれど、覚えます」
「俺が教えてやる」
「はい、御主人様」
男はくすりと笑って少女を抱き上げ、それをベットに降ろして見下ろした。
「もっと太らせねぇとな…」
男は少女のか細い体に被さりましゅまろのような胸を揉む。普段は着物を着せていてそうと分からないが意外と質量がある。耳元の唇から僅かに喘ぐ吐息が漏れていた。
「やべぇな…思っていたよりずっとそそる」
男は下肢に手を伸ばし、細い腿を開かせた。下着の上から触れるとびくりと動き、砂糖細工のような手が男の手を押えるように重なった。
「そこは触らない場所です、御主人様…！」

構わず弱い力を無視して割れ目をなぞる。
「やぁっ…！」
「嫌？」
はっと少女は自分の口を塞ぐ。
「お前は売られて、この体はどうしようと俺の自由だ。そうだな、るり？」
「はい、御主人様…」少女はきゅ、とシーツを握る。
男は愉しげに弄っていたが、下着を脱がせて片足を持ち上げるとつたった滴に笑った。
「感じてんじゃねぇか、初めてのくせに。流石愛玩用だ」
男は和服のまま少女に跨る。
「何か当たります、御主人様」
くすくすと笑いながら片足を持ち引っ張って挿しいれた。
「は、っぁ！――な、なにか…！痛いです、とても痛いです、御主人様…！」
笑みを深くして両足を引く、少女は苦しがるように上半身を反転させて逃れようとした。男が手を離し逃れ得て少女は起き上がろうとする。だが四つん這いになったところを男に尻を引っ張られ、そして一気に深く貫かれた。
「――――っっっ！」
声を失って少女は一瞬背を反りそして為す術なくぐたりと上半身をベットにつけた。尻は男に突き出すようにされている。白い腿には紅い血筋が数本流れていた。
「――凄ぇいいぜ、お前。流石自分で上等と言うだけはある」
男が緩慢に腰を揺らし始めると、少女は目と唇をぎゅと引き結び、されるがままになった。
「……っ」
「どうだ、瑠璃。まだ痛いか？――それとも、気持ちいいか」
「――…よ、よいです、御主人様…っ」
「俺に嘘を吐くな」

「――痛い、です…御主人、様…」
「そうか。まぁ、かなりきついからな。だがそのうちよくなる」
男は打つ腰を徐徐に早くしていく。少しの間固肌と柔肌の当たる音と水音だけが鳴っていたが、男は動きを止めると少女に覆い被さるように重なり、体重がずしりと小さな体に乗せられた。
「鳴け、瑠璃。口を閉じるな…」
男は折り重なったまま指で少女の口を開かせた。そうしてまた律動を始めると今度は揺らす度に鈴の高音が鳴り響く。
「――アッ、アッ、アッ……」
「――本当にいい、お前……今までしなかったのが惜しいぜ」
男は一寸眉を寄せると、水音とともに勢いよく抜き出して少女の太腿に放った。
「これはどうしているんだろうな。孕まないよう薬を飲ませればいいのか？――まぁ、こいつはどの道あと僅かの命か…」
男はぐたりとうつ伏せになっている少女をひっくり返した。すると少女の淡い瞳からは静かに泪が流れ続けていた。見ると、ずっと流していたのだろう、水をかけたようにシーツが濡れている。嗚咽も上げず、ただ静かに流れていた。美しくさえあった。
「そんなに泣くことはないだろう」
頬に手をやり涙をすくい取るが止める筋などないように瞬く間に男の手を濡らしていく。男は瞳をみつめたまま、今度は向き合うように体を重ねた。
「泣いたって止めてやらないぜ――お前は本当はこの為にあるんだ」
男はあやすように頭を撫でて、少女の涙を、涙の跡を舐める。
「泣くな、瑠璃…」
少女は言う通りにしようとしてやっと嗚咽をあげた。涙を止めようとして、嗚咽が漏れる。
「――笑わないくせに、泣くんだな……」

九. 闇夜

「なんだ、俺とは絶交じゃなかったのか」
「いつの話だ。それよりお前、どうだ？」
「何がどうだ」
「お前の扇子だよ」
「相変わらず元気だぜ」
「――はっきり聞こう。情事に泣くか」
「またはっきりと言ったな。敬意を表して答えよう、別に普通だ。でもあれがな、妙に女らしくなるのがたまらないな。普段との差が他の女と違うところだ」
朗らかに友人は笑った。
「それにしてもお前も漸く正しい用途に気が付いたか。俺のおかげだな、不機嫌になるから本気で心配したぜ。結婚も間近の男が人形遊びに夢中なんてな」
彼は久しぶりの悪友の訪問が嬉しいのか、饒舌に喋る。
「で、なんだ。自慢の仕合か猥談か。やっぱり少女だけあってしまりがいいよな、自分以外の男を知らないし仕込ませるのが愉しい」
男が普段からあまり表情を表わさないのも手伝って上機嫌の彼は友人の僅かな変化に気がつかない。
「くどく面倒もないし、好きな時にいつでも抱ける。文句も言わない。悪習滅びぬ訳だ。まぁ俺は普通だけど、酷い奴じゃ何体も壊して使い捨てるのもいるみたいだ。一度に何体も所持したり。いいのは馬鹿高いから質は落ちるだろうけどな。お前のはどうなんだ？やっぱり中身の方も相当いいのか」
「黙れ」
やっと男の不機嫌に気が付く。
「なんだよ、お前から振ってきたんだろ。相変わらず横暴だな」
「泣くんだよ、あいつ」

「自慢か？お前には何度女を寝盗られたことか。おかげで俺は未だ若くして努力というものの虚しさを悟ってしまった。懐の深い友人を持って感謝しろよ」
「お前、少し黙れ。犬は飼い主に似るって本当だな」
「なんだなんだ、犬ってのはちよのことか。言わせて置けば。お前の扇子の無愛想だってお前のせいってことになるぞ」
抗議に付き合う気はないらしく男は無視をする。
「全く知らなかったようだし初めは仕方ないかもしれねぇが、何度やっても泣くんだ。――女にあんな態度を取られるのは初めてだぜ」
「何を言っているんだ、人様の趣味に口を出す気はないがお前は人を泣かせるのが趣味なような奴だろ」
「泣かせるのは好きだが泣かれるのは好きじゃねぇ。今のところ特別苛めた覚えもねぇ」
「さぁ、なんで泣くんだろうな、瑠璃ちゃん。屋敷に好きな男でもいるんじゃないか？お前、暫く放って置いた時があるだろう。自業自得だな。女は俺のような優しく慰めてくれる男に弱いんだ、その筈なんだ」
そうだその手でいこう逆にこいつに泣かされた女を…しかしそれでは俺の沽券が、いやいや、などとぶつぶつと脱線されるのを引き戻す。
「そんなの許さねぇよ。ていうかちゃん付けで呼ぶんじゃねぇ」
「瑠璃」
がんっ
「痛い、酷い、暴力男。そんなんだからだ」
「女を叩いたことはねぇ。お前だけだ」
「お前だけだなんて言われても、俺にそういう趣味はないぞ、ごめんな」
ぼき、と男は拳を鳴らす。
「すみませんでした。調子に乗りました」
彼は独り言のように呟いた。

「――何でだ。奴隷は皆ああなのか。あいつは誰にでもああなのか」
「じゃぁ交換してみないか」
「はぁ？」
「一日だけ、交換しないか。俺のちよとお前の瑠璃ちゃん。そうしたら、分かるだろ。お前のさっきの問いの答えが」
「お前はたまに突拍子もない発想をする」
「お前には負けるさ。どうだ？」
「駄目だ。お前のを借りてやってもいいが俺のは貸さねぇ」
「惚れ惚れするほど勝手な男だな。この坊ちゃんめ」
「お前に相談に来たのが間違いだった。忘れろ」
「病んでるな」
帰る所作をした男はその言葉にぴくりと眉を動かした。
「なんだと？」
「お前、やっぱり最近おかしいぜ。相談ってなんだよ、奴隷だぜ。あと数週間でお前は結婚、扇子は廃棄。泣いたからってなんなんだよ。お前が美しいものを愛でるのは知っているが、本当にそれだけか？」
「どういう意味だ」
「固執する奴じゃなかった。刹那の美、が流だろう。『一期一会て刹那の感こそ色褪せない』とか言って、女まで二度寝たことはない。それを『貸さない』なんて。まさか本当に奴隷に情を持っちまったんじゃないだろうな」
男は彼を竦む形相で睨みつけた。
「誰にものを言っている。貴族の頂きにいて奴隷なんぞに心捉われる訳があるか。俺はただあの奴隷を処分する前に思い通りにしたいだけだ。――俺に抱かれて悦ばない女がいたなんて許さねぇ」
「ならいいけどな。お前がそんな風に余裕無く喋るのは初めてだな」
「――いいだろう。俺の奴隷を貸してやる。たかがもの如きに執着などしていない」

どん、と少々乱暴に背を押されて少女は前に出された。
「御主人様…？」
男は不安気な顔など見もせずに友人に向かう。
「好きにしていい。薬を飲ませている」
「薬って、避妊薬か」
「そうしなければ孕むだろう」
「いや、その時は堕ろせばいいだけだろう。わざわざあんなに入手しがたい薬を使わなくても。あれは上流同士の不倫なんかに使う代物だろう」
「――俺に手に入らないものなどない。俺は奴隷なんかに霧崎の血を一瞬でも宿すだけで不快なんだ」
「はいはい、では預からせて頂きますよ、霧崎様」
男は少女を一瞥した。
「こいつの命令は俺の命令だと思って聞くんだ。分かったな？奴隷」
「――はい、御主人様」
無表情になって少女はこくりと頷いた。男は苛々した様子で背にする。
「おい、持っていかないのか、俺の」
「いらねぇよ」
振りかえりもせずに彼は馬車に向かって行った。暗闇に離れていくその背を少女は淡い瞳でじっと見ていた。

十．贋物

「うるさいです、不良品」
「不良言うなや！ちょっと綺麗な顔してるからって調子に乗らんどいてくれる？ほんま主従揃って傲慢やわ」
「まぁまぁ、仲良くしろよ、お前ら」
「はい、御友人様」
「ちょっと！うちの御主人に色目使わんといてもらえる。あんたは居候なんやから隅っこで大人しくしとき」
聞こえもしなかったように少女はつんと反応しなかった。
「――む・か・つ・く・わ。どう思います？御主人」
「いいと思うぜ。この『俺にだけ従順』感がそそらせるな」
「もうっ御主人。ウチだって御主人だけやのに…」
「拗ねるなよ。分かってるさ、ちよは可愛い」
彼は少女の額に口づけた。ぽっと頬を染めるのを目の前に少女はぷいと顔を背ける。
「あっはっはっ。なんだ瑠璃ちゃんも羨ましいのか、俺達の仲のよさが」
「奴隷とは仲がよいと言いません」
「あいつも素直に可愛がってやれば懐くのに、変に意地があるんだよな。奴隷は奴隷と割り切って愛玩すればいいんだ」
「御主人様にはとても可愛がって頂いています」
「はは、さっきの扱いでか？」
少女は黙ってしまった。
「まぁ今夜はくつろいでいきなよ。あんな屋敷じゃさぞかし息がつまるだろう。うちはわりとゆるいからな、そういうの。あいつがよく来るのもそのせいかもな」
彼はもう一人の少女に声をかけた。
「ちよ、部屋を案内しておあげ。一緒に寝るといい。今夜俺は一人

寝だ」
「はーい、御主人。でもこいつは連れていかんといいの？」
「俺は危ない橋は渡らないのさ。まさか本当に寝ちまって、あいつの理不尽な怒りに遭いたくない」
「それは困ります。るりが言うことを聞かなかったと思われます」
「じゃあ秘密にしよう。取りあえず抱いたってことにして、あいつが気に食わないようだったら俺が本当のことを言おう。兎に角無難が一番だ」
「流石御主人、世渡り上手や」
「はっはっ、それは褒めているのか？ちよ。――瑠璃ちゃんだって、わざわざ俺に抱かれたい訳じゃないだろう？」
「はい、御友人様」
「はっきり言うなぁ。瑠璃ちゃんは睦事が嫌いなんだっけ？」
「扇子に好き嫌いはありません。御主人様が望むように思います」
「けど、泣くんだろう？俺だってあんまり泣かれると自信を失くすから遠慮したいな」
「あれはるり以外は出ないのですか」
「まぁ、ちよは泣かないな。ちよは好きだもんな、淫らな事」
「ウチが好きなのは御主人や」
「奴隷が御主人様を好きと言うのはいけないことです」
たしなめるように少女が言った。
「なんでや。嫌いはあかんかもしれんけど、好きならいいやん」
「奴隷は判断をしてはいけません。ちよは扇子のくせにしつけを受けていないみたいです」
「ウチは行っとらんよ、あんなところ」
「なんだ、興味深い話をしているな」
「一握りの奴隷が小さい内から連れて行かれて『扇子』の訓練を受けんねん。伏せられてるけどな、その殆どが二度とお日様も見れずに死ぬんやって。実際何をされてるか分からんけど、出て来られても皆こんな青白い顔の人形みたいになるらしいで。二度と笑わない

って話や」
「それはそれは、なんとも頂けない話だな。笑わなかったら可愛さ半減だろう」
「ちよが行っていないのはどういうことですか」
「ウチは普通に奴隷として売られたのを御主人に買われたんや」
「それは扇子ではありません。偽物です」
「なんだ、普通に可愛い子を買って世話をさせても扇子とは言わないのか」
「出回っているのは全部偽物です。本物は市場で売られません。保証書がつきます」
「保証書がつくとどうなるんだ？」
「保証されます。絶対に逃げたり逆らったり漏洩したりしません。絶対にです」
「まぁ、最上流らへんはばれたらやばそうなことを裏で色々やってそうだからなぁ。あるいは性癖とか。だから秘密にそんなに金をかけられるんだな」
「そんな紙切れなくともウチだって言わんもん。出ていったりせんし」
「それは俺のとこにもらわれたからさ。どんなことをされても、というのを保証するのは相当なことだ」
「御主人もウチが偽物だって思う？」
「まぁ、扇子だろうとなかろうとちよはちよだ。もう他の使用人にも打ち解けている。それに、笑った顔が一番可愛い。だから俺は今更新しい『扇子』を買う気はないよ」
それに俺は団扇派だしな、と言って彼は小麦の少女に片目を瞑ってみせた。

「ちよはずるいです」
暗い部屋、隣の寝息を聞きながら布団を被って聞こえないように少

女は呟いた。
「なんで？――と言いたいとこやけど、確かにな。ウチは冗談抜きで奴隷中で一番幸せかもしれん」
少女は聞かれていたことに驚きびくりとして布団をますます深く被った。

十一・陽炎

「おや、霧崎君。おはようございます。昨夜はよく眠れたかい？」
「瑠璃は？」
「うちの子と朝食を食べてるよ。可愛いらしいもの同士が喧嘩する様は本当に可愛いぞ。惜しいな、まさかこんなに早く迎えに来るとは思わなかった」
「なんだその言い方は。ないと不便なんだよ、色々と」
「一人じゃ着替えもできないお貴族様を嘲っていたのが懐かしいな。お前の代には蛍の光程の僅かな期待を抱いていたのに」
「違う。俺は自分で済ませている」
「さてさてと、霧崎の若旦那様を待たせるのは失礼かな。どれ、呼んでこよう」
「いい。まだ呼ぶな」
「へーい」
「てめぇ」
軽く睨んだ後、はぁ、と男はため息を吐いた。
「幸せが逃げるぞ。悩みがあるなら言ってみろ」
「別にねぇしあってもてめえには言わねぇよ」
「恥ずかしがるな、結婚前の男は皆鬱鬱とすると聞く」
男は無視をする。
「――瑠璃は泣いたか？」
「いいや？」
「だろう、あいつ――今泣いていないと言ったか」
「ああ」
「――へぇ」
男は両の口端をあげた。
「待て、なんだその笑み。恐いぞ、怒るよりも恐い。骨董の店を一店その場で潰す時も笑った。あれは偽作を売っていたから自業自得

だが、瑠璃ちゃんは悪くないぞ」
「瑠璃ちゃん？一晩で随分仲良くなったな。だが俺のものをお前にかばわれる筋合いはない」
「いや、言ってだろ、貸す前も瑠璃ちゃんて。もう厭だ、お前の理不尽さ。こうなると思ったんだ」
「どうなると思ったって？」
「霧崎君、ようく聞いてくれ。実は抱いていないんだ。触れてすらいない、多分」
「だからなんだ？そんなことはお前がどうしようと勝手だ。だが俺は嘘を吐かれるのが吐き気がする程嫌いなんだ」
「信じろよ、俺はお前にへつらったことなどないだろう」
「あれ程可愛いものを放っておく男がいる訳がない」
「お前だって初めは抱かなかっただろう」
「俺は女を無理に抱かない。大事にしたつもりだ。だがあいつはいつになっても笑わなかった。可愛がってやろうと思ったんだ。なのにあいつは泣きやがる」
「笑わないのはな、お前のせいじゃねぇよ。俺達とは育った環境が違うんだ」
「分かっている。あいつは奴隷で、俺は貴族だ」
「それがお前の悩みか？」
同時に、だん、と音がしてそう言った男の左頬は殴られていた。よろけた態勢を立て直す。
「あまり俺を挑発するんじゃねぇ、光次郎。上流とは言えお前程度の家くらい潰すのは訳ねぇんだぞ」
「今さらそんなことが恐くてお前の友人やってられるかよ」
殴られた男は殴り返す。二人の男は睨み合っていた。
「千次、お前は一体どうしたいんだ」
「――瑠璃を壊したい」
「なら壊せばいいだろう。お前の物だ、誰にも文句は言われない」
「お前も、奴隷は人間じゃないと思うか」

「言葉の定義を決めるのはお前らだ。貴族が人間じゃなく神だと言えばそうなる」
「あいつは人形だ。――あいつも結局同じだ。俺の顔色を伺って答えを決める。だけど嘘を吐く訳じゃねぇ。心がねぇんだよ。放って置こうと可愛がろうと、他の男にやっても何も感じない――人形なんだよ」
「心がないのに何故泣く？自分でも分からないどこかにあるんだろう」
「知ったようなことを言うな」
「なら勝手にしやがれ」
「――俺はいつだって勝手だ」
男はちらりと脇に目をやった。騒ぎに気付いたのか、いつのまにか二人の少女達が怯えた様子で立っていた。
「いくぞ、瑠璃」
男が背を向けると、彼らにぺこりと頭を下げて慌てたようにとと、と従いていく。
「御主人！」「怖かったか、すまないな」と言うのが後ろから耳に届いたが、舌打ちをしたその背中にはとても声をかけることはできなかった。

部屋に着くと服を破くように乱暴に脱がされてベットに投げ出された。男は何も言わずに少女を何度も激しく突き、そして果てるとどさりとベットに仰向けになった。ぐいと細い首を掴んで顔を向かせる。少女は泣くのを堪えて顔がぐしゃぐしゃに歪んでいた。
「そんなに俺が厭か、瑠璃」
男はふ、と笑って、ふるふると懸命に振る細い首を絞める。
「嘘だろう、こんなことをされて嫌いじゃない筈がねぇ」
男は手を離して、けほけほと咳をする少女を眺めた。

「憐れな人形だな。貴族に生まれていれば持て囃されて、いい夫に大切にしてもらえただろう。だがお前は奴隷だ。もう直に処分される」
つつ、と体をなぞって薄らと笑う。
「どうやって壊してやろうかなぁ。折角だから使用人共に振舞ってやるか。要人を招いてお前で遊ぶのもいい。ダーツの的にしたら血が白い肌を伝ってさぞかし綺麗だろう。それか、お前を褒めてくれた大臣にやるか。あいつは奴隷の女を炙ったり毒を注入して悶えるのを見るのが趣味らしいぞ。珍しい瞳の色をした眼球を集めるものも生皮を剥いで布の生地にするのもいる。お前はどれがいい？」
なぞった唇が微かに震えているのに男は満足して笑った。
「ほら、怖いだろう、嫌だろう。言ってみろお前の気持ちを。お前が厭というならしない」
「るりは御主人様がお望みのことを厭ではありません」
「…ふーん」
男は少女の上にのしかかって頬を撫でた。
「可愛くねぇなぁ」

十二・逃亡

「るり、逃げよう」
少年は少女を必死に見つめた。この場所は誰も来ることはない。
「若旦那様が離さないから人目を盗んで会えなかった。だけど、その間にこの屋敷を調べつくしたんだ。絶対に逃げられる」
「るりは逃げない」淡い瞳を縁取る長い銀の睫毛を落として少女は言う。
「るり、時間がないんだ。もう会える時はないかもしれない。今しかないんだ」
「るりは、分かっていた。だから、やくそくはもういい。竜は奴隷じゃない。自由に生きて欲しい」
「――俺は本当は平民じゃない。母親は奴隷だ。父親がかなり高貴な貴族らしくてその手回しで平民のように生きてきた。だけど本当は、るりと同じなんだ」
「同じ、じゃない」
「分かってる。のうのうと生きてきた俺はるりの苦しみの十分の一も分かっていないんだろう」
「だけど、」少年はぎゅ、と拳を握った。
「あの日の約束を忘れたことなんてなかった。――俺がお前を買う。そして幸せにする」
「りゅう…」
「…こんなところで、再会するなんて思わなかった。みじめだった。俺にはお前を買うことができなかったんだ。――『扇子』は、一生働いても手の届かない、高嶺の花だった」
少女は少年の両手を取った。
「るりは、分かっていた。りゅうにはるりを買えない。瑠璃はとても上等品だから。だけど、よかった。りゅうがそう言ってくれたのが、ずっとずっと嬉しかった。だから、いっぱい我慢できた。そし

たらまたりゅうに会えた。忘れないでいてくれた」
「るり、ごめん。ごめんな…！」少年の目からは涙が零れ落ちていた。
「るりは、新しいやくそくをしてほしい」
少年は少女の瞳を見つめた。涙でできた海に優しく包み込まれるようだった。
「るりがいたこと、忘れないで」
少年は、ぎゅうと少女を抱きしめた。
「しない、そんな約束。そんなこと言うな。るりは死なせない。るりがついて来ないなら、俺はお前をさらう。どうなったって構わない」
そして細い手を握ると力強く歩き出した。
「りゅう、だめ」
「あの時にこうしていればよかった。俺は後悔したんだ。もうお前がなんと言おうと俺はお前を離さない。お前の言うとおりにしていたらお前はちっとも幸せにならない」
「りゅう、お願い、やめて。るりは行かない」
引きずられるように歩きながら少女は繰り返した。
「なんでだよ。このままここにいたら終わりなんだ」
「るりは御主人様のもの」
少年は駆け出した。手を強く握りしめながら、振りきるように駆け出した。
「りゅう…！」

「どうされますか。奴隷の方は処分するとして、近衛の方は」
彼専属の若い執事は窓辺に立つ主人に指示を仰いだ。男は雨を眺め

ている。
「……そのまま」
「はっ？」
「両方、閉じ込めたままにしておけ。処分は追って決める」
「かしこまりました」
主人のその端正な横顔は常ならばある筈の余裕の瞳も不敵な口元も消していて、それは仕えて初めての事だった。
「御心中お察しします…。きっとあの奴隷が死を恐れ唆したのでしょう。しかし平民の身で若君に格別の取り立てをして頂いたというのに、恩を仇で返すようなことをするとは。これだから身分の卑しい者は……」
「――下がれ、川野」
「はっ。出過ぎた物言いを…失礼致します」
執事が恭しく頭を下げ部屋を出ていくと、男は少し口元を歪めて微笑した。
「今あいつの顔を見たら、本当に壊しちまいそうだ…」
曇った灰色の空からとめどもなく雨粒が降り落ちている。
「――瑠璃……」

十三・少年

簡素な窓のある部屋で、彼は思考が麻痺し何もないところをじっと見つめていた。何故自分は、何故自分は、何故自分は、何故自分は、何故何故何故何故――……

屋敷内は雅な雰囲気を崩すのを厭い警備を外側に比べて極端に薄くしていたのだ。外は自分の想像を遥かに超えた堅固さで、鼠一匹通さないだろうと思われた。

甘かった、などでは済まされない。済まされなかった。自分の守ろうとした少女の身を考えると恐ろしく恐ろしかった。『旦那様の扇子』でなくなったらどんな扱いを受けるか――

扉の開く音などに麻痺した脳は反応しなかった。自分はいつのまにか手を縛られ、使用人用の廊下を歩かされていた。恐怖が突然襲う。殺されることにではない。むしろ酷くむごくに殺されなければならない。だけども誰も守る者のいなくなる彼女を置いて逝くことだけに恐怖を感じた。それが死に逃れなかった故だった。

目の前の重厚な扉が開かれ、手首の縄を引っ張られるままに中に入った。その上質な造りの部屋にゆるりと座っていた男の姿に俄かに意識がはっきりと引き戻される。

「――若旦那様…」

男は手首の縄を解くように言い自分を連れてきた者達を黙らせ部屋の外に下がらせた。

「痛々しいな、竜」彼は痣だらけの自分に笑って向かいのソファに座るよう促す。

「自分が連れ出したんです」

真直ぐに向かいきっぱりと言った。

「一目見て心奪われ、自分のものにしたいと思い抵抗するのを無理

矢理連れて逃げました。彼女は被害者です。全て自分の過ちです」
主人はいつもの通りにどこか人を愉しむように微笑し、一見すると何事もなく戯れに使用人を呼び出したようだった。
「好きな女を想ってしたことをお前は過ちと言うのか？」
彼は予想外の返答に言葉が詰まった。黒の瞳に全て見透かされているようで、やはり頂に立つ器だと思った。纏う格に圧され自分はとても矮小になった気がした。
「嘘ではないが全てではないな」何も答えられない自分に続けて言う。
「瑠璃とお前とはどういう関係だ？」
――嘘はつけない。それは直感か本能か、この男には然ずから人を従わせる何かがあった。
「――彼女と初めて出会ったのは、この屋敷に仕えさせていただく前――十年も前のことになります」
ほぉ、と興味深げに、しかし男は何も言わない。彼は何もかも吐露したい気持ちに駆られた。誰にも明かすことのなかった、ずっと自分の核であった想いを。

「――あの日、丘で花を摘むるりを見て、俺は一目惚れをしました。彼女を見て、遠い国の身分の高い令嬢か――とにかく、叶わぬ恋だろうと同時に悟りました。だけどそれは反対で、彼女は奴隷でした。俺はこっそり会いに行っては食べ物を持っていったりしてどんなに短い時間でも毎日姿を求めました。彼女はいつも一口しか食べないで、皆に分けると言ってとても嬉しそうに笑いました。彼女が別の場所に行くと言った時、逃げようと言ったら、彼女は自分が行けば皆がお腹が空くことがなくなると言って首を振りました。だから俺は約束したんです。――大人になったら必ず迎えに来ると。二度とお腹を空かせることはしない、きっと幸せにするから一緒になろう、と。幼い彼女は何も分かっていないだろうけど俺は誓いの口付けをして、彼女は待ってると笑って――行ってしまいました。咲いたば

かりの花のように笑う子でした」

まるで独白のように、幾千度再生されたか分からない想い出のままに語った。この想い出に一かけらでも嘘やごまかしの不純物など交ぜることはできない。そんなことをすればたちまちに泡のように消えてしまいそうだった。自分という存在意義の拠り所にするにはとても儚い初恋を色褪させまいと変色させまいと秘めてきたのだ。

話し終えると、男は「それはとても可愛いだろうな、」と言っただけだった。

自分は刹那に床にひれ伏し頭をつけた。

「お願いします、るりを生かして下さい」

なんと情けない。約束も果たせず他の男を頼って懇願するとは。だけども彼女が咲ききりもせずに手折られるのだけは――男の沽券などどれだけ捨てても構わない。

「俺の命など代わりになる筈もありませんが、差し上げられるものは全て差し上げます。今ここで自害だってします」

「お願いします…！」

少年は只管床に額をつける。絞り出られる熱い涙が固い頬を濡らした。

「全て、か？」

男の声がした。ばっと顔を上げる。一縷の望みに胸が熱くなる。

「はい、全てです…！るりの命が助かるならば、何でもします。何でも従います…！」

男の口端が少し持ち上がり、自分を試すように言葉は投げられた。

「瑠璃への想いを捨てるか」

それは悪魔のような問いだった。彼は、言葉を失う。――簡単だ。たったその一言で愛しい命が繋がるならば、何も躊躇することはな

い。どの道どう足掻こうと叶わぬ恋なのだ。彼女への想いか彼女の命か、そんなの決まっている――少年は声に発した。

「できません」

違う音が部屋に響いていた。顔の全ての筋肉を使っても涙も鼻水も止まらず、歯を食いしばって嗚咽を止めるのが精いっぱいだった。――やはり自分は口先だけだ。何でも、と言っておいて――だけど、この想いだけは。

「俺の命から剥がすことはできません。滅するならば命と共に」

「――そうか」

夕日の逆光で男の表情は分からなかったが、声音は、もしかしたら満足気な含みがあったかもしれなかった。男は立った。

「では命をもらおう」

「はい…！有難うございます…！」

それは心から口を通って出た思いだった。

「今ここで命を絶つことをお許しいただけるでしょうか」

心の意気を男の目前で証明する為に少女の笑顔をまたと望んでしまう前に――だがその希望は無残に打ち砕かれた。

「はぁ？許さねぇよ。お前は馬鹿か」

「――は、はい。申し訳ありません。どのような死でも謹んでお受け致します」

男は奇妙に笑い、少年は思わず顔を上げた。

「もらうと言った。手に入れた途端に捨ててどうする。使わなければ意味がないだろう」

それは悪魔のような微笑みでぞくりと何かが背筋を走った。

「まぁ、使い道はおいおい考えるとして、取りあえずお前は分家の屋敷にでもいけ。ここではもう使えないだろうからな」

確かに、仕えるべき主に背いたこの屋敷で部下をまとめることなど最早できないだろう。当然この霧崎家を出されたとあっては雇って

もらえる場所などない。一見すると軽すぎる処遇だった。普通ならば恩情をと頭を垂れるだろう。――だが、
「俺に背いて死で償えると思うなよ」
この主人の愉しげな言葉に嘘はないだろう。

さて、と言って立つように促され、彼はそれに従った。
「主としてはお前を許すが、男としては許せねぇ」

――一瞬、なにが起こったか分からなかった。また自分が床にいるのに気が付き、そして痛みに、次いで思い切り殴り飛ばされたことに気付く。呆気に取られた。予想がつかなったとはいえ仮にも自分は主を守る為訓練されているというのに。
「二度と俺の女に手を出すな」
彼の黒く燃える瞳に刹那息が止まったが、一瞬過ぎればいつものようにどことなく笑っていた。そして男は背を向けかけたが思い出したように振り返る。
「お前はやはり俺の見込んだ男だ。あそこで嘘を吐いていたらお前を許すことはなかった」
「…嘘、ですか？」
彼は今度こそ背を見せて部屋を出ていく。その間際、誰にともなく聞こえた。
「人間に気持ちを捨てるなどできる訳がない」

十四．少女

何もない、無機質な灰色の牢屋の中で投げ出されたままに少女は横たわっていた。猿轡を噛まされて手首も足首も縛られ、芋虫のようである。目を覆う布は濡れていた。

かつん、と鳴った足音に気付いて少女は白い顔を上げる。月の光に照らされて一層蒼白く見えた。

「んふふんふむ……」

入ってきた男は何も言わずにそれを抱き上げ、暗い廊下に足音を響かせた。

男はそれを柔らかく白い布の上に置き、そして見つめた。椅子を引いて来て逆向きに座り、その背の上に手を組みその白く繊細な蝋細工のような体をぼんやりと眺めた。

いつもの男の寝室ではなかった。男の趣味ではないような、一目で誰もが豪奢と分かる煌びやかな造りの部屋だった。男の座る椅子も含めて調度品の一つ一つに華美な装飾が施されていた。

「淫靡だな…」

そう口の中で呟くと、男は少女の乗る寝台にギシリと乗り上がり足首を縛る縄を解いた。足首を持って左右に引くと人形のように微塵の抵抗もなくそれは開いた。

彼は慣れた手つきで下着の上からそこを弄る。間もなくして布の上から指を挿し入れると、それはふるりと震え「ふぅ、」と息を漏らした。下着の間から入り込み今度は指を増やしてゆっくりかき回す。水音だけが鳴り響いた。

少女が達しそうになる間際で弄んでいた指を抜いた。そうして猿轡を外して唇をつつくとそれはその指を口に含んで愛液を舐めとる。

男はそこで漸く手の縄を解き、目隠しも外した。

「よう、瑠璃。お前は誰にでも足を開くんだな」

頬を紅潮させた少女が何か訴えるように潤んだ瞳で見上げていた。
頬には乾いた涙の筋がある。とても淫靡だと男は思った。
「るりは御主人様を間違えません」
少し掠れていたが、久しく思える鈴のような音で少女は言った。
「そうか？――なら、褒美をやろうか。何が欲しいか言ってみろ？」
彼は口元を笑わせ折らせた膝をさらに開くと少女の酷く濡れた下着をなぞる。びくんと震えて少女は訴えた。
「りゅうは悪くないのです、御主人様」
それは初めて期待を裏切られた答えだった。
「るりが全部悪かったのです。お願いします、御主人様。りゅうに悪いこと、しないで下さい。悪いことは全部るりにして下さい」
こうも必死な瞳も自ら意思を伝えるのも初めてのことだった。
――『るり』『りゅう』この情景の既視感に一気に血が昇りつめてくるのを押えて、男は足を放すと微笑をしていつものように愉しむように言った。
「全部？するとお前が逃げだそうと言ったのか、この俺から」
「――そうです、御主人様。るりが言いました」
蒼白で、痙攣を起こしたように全身がかくかくと震えていた。目の前の自分よりも何かからの恐怖に怯えているように。体が何かの拒絶反応を起こしたようでもあった。
「お前の仲間達を見棄てて？」
「――はい、御主人様…」
それでも震える唇をきゅ、と引き結んで自分に淡い瞳を訴える。
「御主人様、だから、りゅうは悪くないのです…！」
彼は頬を撫でて言った。
「お前は仲間に優しいんじゃないのか？――あの男が言っていたぜ」
「るりは優しくない。――優しくされたかっただけなのです」
「ほぉ？」
「――るりは仲間に入れてもらえなかった。髪も目も違くて、気持ち悪かったから。けれどるりは優しくしてもらいたくて、仲間に入

れてもらいたくて、頑張ったのです。――けれど、優しくしてくれたのはりゅうだけでした。るりは何もりゅうに優しくしていないのに。――りゅうはとても優しい」
「へぇ…。俺は？」
「御主人様は御主人様です。判断してはいけません」
「俺は、お前が俺をどう思っているか聞きたいんだよ」
「――御主人様は……るりは……」
混乱したように口ごもった少女を見て男はふ、と寂しげに笑い少女を押し倒した。
顎を持って口づける。何度も口角を変えて食み、口内を貪った。頃を見て少女に息を吸わせるとまた舌を絡めて遊ぶ。いつもより長く苦しいそれに少女の意識はおぼつかなかった。
「許せねぇな」
浴びせられるキスあられが止み口端をぬぐわれぽつりとそう聞こえた、と思ったら再び柔らかく短い口づけが落とされる。それはとても優しい触れ方だった。
「御主人様…りゅうを許してくれますか」
「お前がその男を忘れるなら許してやると言ったら？」
「るりはりゅうのことを忘れます」
「お前は許せねぇな、るり――心に嘘を吐くから笑えねぇんだ」
「御主人様、るりは許されなくてよいです。りゅうを――」
「瑠璃…抱かれている時は俺のことだけを考えろ」
「――はい、御主人様…」
男は銀の髪を手に巻き取りうなじに口を付けた。
「瑠璃、瑠璃、俺の名を呼んでくれ…」
「奴隷は御貴人の御名前を口にしてはいけないのです、御主人様――」
月明かりが照らす少女の白い体躯に紅い華が散っていった。

十五．掟破

「お前、今なんと言った？」
「だから、妾にする」
がしゃんと長テーブルが揺れ、ワインが白い食卓に紫の染みをつくった。
「何を言っているのだ。奴隷を妾にするなど聞いたこともないぞ！しかも貴族の範たる霧崎家に許される訳がないだろう！そもそも結婚前からそんなことを言うとは――相手方は皇族だぞ、下手をすれば霧崎家の地位すら揺らぎかねん」
「まぁ落ち着きなさい、総一郎」
「しかし父上！」
激昂して立ち上がった息子に向かって老父は宥めるように言う。それからどこ吹く風で紅茶脇のマロン・グラッセをつまんで「食うかな」と呟いた孫に向かった。
「気持ちは分かる、愛用してきたものを捨てるのはなんとも心が痛むからのう。しかしこれは儀式なのじゃ、婚礼前に扇子を授けそして前夜に手放すのはの。もう扇子の真の意義は分かっておるじゃろう。本来は妻との初夜に際しての前準備なのじゃ。男が慌てふためくようなことでは幸先が悪いからのう。だから扇子は穢れ無き乙女なのじゃ」
彼は知ったことか、というようにつまらなそうに菓子を指でぼろぼろと潰した。
「まぁ、そういう意味ではお前さんには不必要だったかもしれないが、しきたりじゃからの」
「話はそれだけか？」
指をナプキンの端で軽く拭くと、カップを持ち残りの紅茶を飲みほした。
「それだけじゃないわい。だからの、形だけの儀式は執り行ってか

ら使用人にでもすればよい。奴隷とはいえ暫く傍で奉仕させた子に情がうつるのは全くなかった訳ではない。例外は今迄にもあった」
「阿呆か、じじい」
「お前は口が過ぎるぞ、千次。御祖父様に向かって――」
男は無視して続ける。
「俺に寵愛を受けたとなれば、女は嫉妬し男は好奇な目でみるだろう。あいつは絶対苛められっ子体質だ。俺が言うのもなんだが酷く加虐心を煽られる。しかし俺も使い捨てたものがぞんざいに扱われたりしたら忍びねぇ」
「これ以上の我儘は通さんぞ、千次」
「一や、ちと出てくれんかの。次と二人で話したい」
「父上…」

そうして二人が部屋に残される。
「ではな、これは本当に内密になのじゃが、扇子を平民の身分にして屋敷の外に出してやるというので手を打たんか？怪しまれないよう生活を支援してやって。かつてこうして掟を犯した男がいた」
「それは俺の目の前にいる男のことか？」
「本当に可愛げない孫じゃのう。歯に衣着ぬ」
老人は茶目っけに笑う。
「どうじゃ？屋敷内に奴隷として置き残しては声かけることもかなわんが、外ならばこっそり逢いにもいけるぞ」
「打たねぇよ。こっそり逢うなんて面倒くせぇ」
「お前のう…わしだってもう怒っちゃうぞ。貴族にだって守らねばならん不自由はある。そもそもえりかさんには何と申し開くつもりじゃ」
「あいつにはもう話をつけてある」
「なんと。なんと言ったのじゃ」
「別に、そのまま偽りなく話しただけだ。――ある男に懇願されて扇子を残すことを約束した。だから捨てずに置いておく。もしこう

いう俺に納得できないなら婚約は破棄して構わない、てな」
「――して、答えは？」
「『親に定められた結婚でしたが、お優しい心を持った殿方と結ばれてえりかは幸せです』とさ。本当に幸せな思考だよな」男は笑って言う。
「可哀想に。あの御聡明でお優しい方に我が愚孫をやるのは本当に躊躇われる。しかし世の不思議にえりか嬢はお前さんを大層お気に召しているからなぁ。なんと非道い男じゃ、断れんと知って言ったのじゃろう」
「さあ。どっちにしろ俺は一度決めたことはなんと言われようと貫くぜ」
「全く……――まぁしかし家督はお前のものになるのじゃ。たとえお前の代に千年の名が途絶えようとこの霧崎家、焼くも煮るも好きにせい」
「あんたの孫で良かったぜ」男はからりと笑って席を立つ。
「心配するな、霧崎の名はこの名に懸けて必ず堕とすことなく次代に継ごう」
だが出ていくところでふと振り返った。
「ところで、親父は知っているのか？――この屋敷に弟がいる、てな」
老父の驚く顔を見ると満足気に笑って男は出て行った。
「――全く、我が孫ながら恐ろしい。この淀んだ世界に何か一問答起こりそうな気がするのう。老後の楽しみが増えたわい」

「ん…んく、」
男の欲を飲みほして綺麗に舐めとると頭が撫でられた。
「よしよし、上手くなった」
「御主人様…」不安気に心細い様子で見上げてくる。

「どうした、瑠璃？可愛い顔をして。もっと欲しいか？」
「……りゅうが、いなくなりました」
「ああ、そうだな」
「教えてください、御主人様。りゅうは、どうなったのですか。何故るりは罰を受けないのですか。りゅうは今――」
「りゅうりゅう鳴くなよ、可愛くねぇな。全然忘れてねぇじゃねぇか」
「……」きゅ、と唇を閉じて少女は俯く。
「あの男なら、一族の別の屋敷で働いているぜ。故は伏せているから心配することはないだろう。中々肝が据わっているしな」
ほっとしたように顔を上げた。口元は心持ち緩んでいるが微笑んではいない。
男は少女の両頬をぐに、と引っ張りあげる。そうしておいてぷ、と笑う。
「笑うとこんな顔か？可笑しいな」
少女はぐにぐにと柔らかい肌を引っ張られるままになっていた。
「明日は婚礼前夜だ」
はは、と笑って男はどさりとベットに身を沈めた。
「笑えねぇなぁ、ほんと笑えねぇよ。――だから俺ばかりが嫌われる」

十六・終宴

「今宵の儀式の乾杯酒でございます。半刻程で天にも昇る夢心地となるでしょう」
「ああ」頷いた男の瞳は井戸底のように深く暗かった。

格ある和室に最上の料理・酒の宴の準備が整われ、親しい友人二〇人程が招かれた。ほぼ全員が背後に着飾った扇子を置いている。全員が揃うと上座に男が腰を降ろした。
「よく集まってくれた。堅苦しいのは明日で十分だ。今宵は是非寛いで存分に飲み食べて行ってくれ」
見計らったように戸がす、と開く。皆が思わず息を飲みその瞬間から呼吸を忘れた。
鮮やかな緋の着物に金と青の花が舞い、銀の髪は結いあげられ白磁の顔の化粧に映える紅い口紅が引かれている。なんとも艶やかに可憐で、天女か竜宮かこの世の造形物ではないかと思われた。皆眩い光をみる表情で我を忘れ、男でさえ目を細めた。
「さぁ瑠璃、皆に酒を振舞ってくれ」
少女は男の左手側から客に酒を注いでいく。白いうなじにかかるおくれ毛、伏せた長い銀の睫毛から匂い立つ色香が漂っていた。袖の動くたびにみずみずしい花の香りも淡くする。
軽やかな一動作ごとも美しく、少女が一巡し終わるまで皆息を呑んでただただ見つめ続けていた。
「さて諸君、乾杯といこうか」
その笑いを含んだ声に惚けた顔をはっと戻し各々器を持った。乾杯、という声に喉を濡らす。今迄にない甘美な味がした。

男は平の盃にとくとくと手酌をし、なみなみと注がれた清酒を少女に持たせて言う。
「瑠璃、お前も飲んでみろ」
こくんと頷き少し口に含み、飲み口を指で拭き取るとかくんと礼をして男に差し出し返した。
「どうだ？」
男は受け取らずに微笑して言う。
「美味しいです、御主人様」
男はそうか、とくすくす笑う。少女はその微笑み方に知らず背筋を伸ばした。
「全部呑んでいいぞ、瑠璃」
強く匂い立つ透明な液体に視線を落とす。不安気な淡い色が揺れてじっと自分を見つめ返していた。
「御主人様…」
口端がさらに上がったの見て少女は諦めまた目を水面に戻した。く、と盃を傾けこくりこくりと飲む。
「いい子だ」
盃から口を離すが全く量は変わっていないように思えた。頭が揺さぶられた後のようにくらくらとする。ゆらゆら揺れる水面を溢さないようにとするが力が入らない。
「どうした？俺の注いだ酒が呑めないか」
おいあまり苛めてやるなよ、というのが遠くか近くか聞こえた時、自分の手には男の手が被さるように添えられて、口の中にまた冷たい液体が流れ込んできた。むせかえりそうになるが飲み干すまで離してくれそうになくこくこくと喉を鳴らす。男が手を離した時盃いっぱいの清酒は空けられていた。からんと杯を離しぐたりと崩れそうになったのを男が肩を支える。体中の血が熱い。どくどくどくと脈が狂ったように走っている。
次々と料理が運ばれ宴の進む中、少女は半分意識を遣っていた。頭は男の膝に乗っていて時折猫のように撫でられていたがそれすら

判然としていない。

宴もたけなはに男が目配せをすると台が次々と各々の前に運ばれた。その中央に風流な波文様の懐紙、そこに砂糖のような白い粉が盛ってある。隅に青いグラスに入った水があった。男達は何も言わずに粉をグラスに入れ、後ろに控えていた扇子達に渡す。彼女たちもまた何も言わず受け取るままにそれを全て呑みほしていった。

「御主人…これなに？なんか空気おかしくない？」

「すまない…通過儀礼なんだ。呑んでくれ」

「なに？毒…？」

「毒じゃない。むしろ安全の為だ…」

「な、なに言ってるん？うちなんかいややわ、御主人…」

ただ一か所からひそひそと声が聞こえ、何人かが舌打った。

「うるせぇな。そこのを外に出せ、光次郎」

その若者は少女を連れ男の横を通り過ぎて部屋を出て行く。

「すまない、千次」

「帰ってくるな」

「――恩に着る」

男はうとうとしている少女に目をやり起こさせた。目をこすった少女は頬に赤みを差していて自分の体を固く抱いて男に擦り寄った。

「御主…人…様…なんだかとても…体が熱いです」

男も同様に粉を水に溶かし少女にそれを無言で渡した。少女は受け取ると美味しそうにこくこくと水を一気に飲みほした。男は酒を煽る。そして少女の前側で結ばれた帯の結びをぐい、と解いた。

「御主人、様…？」

少女が主人の黒い瞳を見上げようとすると、前を向かされた。

そこには、肌蹴て男達に玩ばれている人形のような少女達がいた。男の一人がこちらに来て手を伸ばす。

「やっ、だめです、るりは御主人様のものです…！」

男にしがみつくが彼はやはり何も言わずにそれを剥がして男に引き

渡す。
「御主人様…！？」
「お前が宴の主役なんだよ。可愛がってもらえ」
「御主人…様…」
座敷の中央に連れて行かれる少女の滲み目から黒い眼差しを逸らさずに彼は口を歪めて笑った。
「――仕方ないだろう？俺だってこの命を背負って生まれてきた…」

十七．儚夢

『るりはね、おおきくなったら「せんす」さんになりたい』
『何言ってるんだ、るり』
『だってそしたらね、るりはひとりにならない。そばにいてやくにたつの』
『だめだよ、るり。るりは何も分かっていない』
『いいこにしていたらかわいがってもらえるの。るりはいっぱいいいこにして「ごしゅじんさま」にやさしくされたい』
『るり…るりを泣かせたくない。俺がなんとかするから』

ざあああああ、と水が体を流れて行く。柔らかい泡が体をくすぐりまた流されていく。体の内も外も洗われてまたざあああああと全て流れて行く。

虚ろな瞳の白い人形が何度も何度も洗われていた。やがて柔らかい布に包まれると抱き上げられて寝台にふわりと乗せられた。
男が光の射さない黒眼で見下ろすと、それの唇が微かに動いた。
「な…で…る…り…いい…こ…た…のに…」
男はそれを胸に抱き締めた。
「すまない、瑠璃…」
「ごしゅ…さまは…やさし…く…な……」
男は額に優しく口づけて降ろすと布団を被せた。
「ゆっくり休んで……忘れろ」

少女は目を覚ました。頭ががんがんと痛んで何故自分が布団にいるのか分からなかった。宴でお酒を飲んで、それから――？
「目が覚めたか」
男の手が近づいて、思わずびくりと体を引いた。自分のその反応に驚いて慌てて主人の顔を伺うと、なんとも読めない、微妙な表情だった。相変わらず笑っているような、それとも真逆のような。
「御主人様…？」
「瑠璃、今日は俺の婚儀がある」
「はい、御主人様」
「お前はまだ具合も悪いだろう、今日は寝ていろ。俺は明日の朝までいないからゆっくり過ごすといい。但し俺の部屋からは出るな。不都合はないようにさせておく」
「…御主人様、聞いてもよいですか」
「なんだ？質問に依るな」
「るりが死ぬのはいつですか」
「さぁ、お前の寿命までは知らねぇよ」
「そうではなくて、御主人様の御婚儀前に扇子は捨てられます。るりはまだ生きていると思います」
「それは、なしだ。お前はまだ手元に置いておく」
それを聞いた少女は大層吃驚した顔をして、必死に縋るように言った。
「それは困ります。瑠璃は死ぬ約束の筈です」
「お前…死にたいのか」
すると少女はかくんと首を縦に降ろした。
「理由を言え」
「――るりは、次ぎは黒い瞳で黒い髪の、できるのなら人間に生まれたいです。るりはいい子にしていたのできっとそうしてくれると思います」
「お前は瞳も髪も今のが美しいし、人間だ」
「人間ではありません。るりは生きている限り奴隷なのです」

「人間にしてやる。もう俺を主人と呼ばなくていい。お前がちょこちょこついて来なくなるのは非常に惜しいけどな」
男は少女を抱き寄せた。
「お前は俺の妾にしてやる」
「御主人様は…分かっていません」
「生活は心配するな。家をやって使用人もやって、欲しい物は何でも買ってやろう」
「分かっていません…それは人間ではありません」
「何でだ？俺にここまで寵愛を受けるなんて、貴族の女が望んでも叶わないぜ」
「けれどるりは望みません」
「ほぉ…言うじゃねぇか。つまり、お前は俺に抱かれるのが厭で死にたいんだな」
黒い眼差しが揺れる空色を射す。
「そうではなく…ただるりは、人間は自由だと思うのです」
「自由にしてやるよ、お前が俺を拒まない限り」
「るりは自由になったら死にたいのです…！」
遂に少女は透明の粒を溢した。
「まだ出るのか…昨日あれだけ泣いておいて」
男が涙をすくって呟く。
「困ったな、死なれるのは流石に許可できねぇ。死ぬ自由を奪うには奴隷にして置くしかないのか？もう俺は憐れ過ぎて奴隷っていうのには辟易してきたんだけどな」
「御主人様…早くるりを失くして下さい」
「――いいのか？あいつは悲しむぜ」
はっと少女はしたが、だがやはり首を振った。
「いいのです。もうこの体ではりゅうには会えないから」
「俺に抱かれた体か？――それとも他の男にまわされた体か？」
男が少し声を荒くして言うと、少女の表情が止まった。
「あ…あ……」

「死ぬなよ――命令だ、瑠璃」
男は暗い顔をしてその部屋を出て行った。

十八・瑠璃　【最終話】

「千次様…えりかは幸せです」
「そうか、よかったなら何よりだ」
「千次様と結ばれるなんて、えりかはこの身に生まれて幸せでございます」
男は女を見下ろして惚けるように緩んでいる頬を撫でた。
「言わせてみてぇなぁ」
「千次様…？」
「いいや、身に余るお言葉だぜ」
女の散らばる黒髪を掬って黒い瞳を眺めていると女は恥ずかしそうに身を捩った。
「そうご覧になられては恥ずかしゅうございます」
「そうか」
男は華美な装飾のベットから起き上がる。
「千次様、行ってしまわれるのですか…えりかはまだ千次様とこうしていたいです」
手を取って言うと彼は振り返って女の手を外した。
「男は日の出る前に女の寝屋を出るものなんだよ」
「千次様…分かりましたわ、えりかは今宵を待ちわびます」
「えりか」
「はい」女は嬉しそうに返事をする。
「早く俺の子を孕め」
「はい、千次様…！」
男は女の寝室をあとにした。
「それまでだな…」と呟いて。

「ふっ、う、うぅ…」
枕に突っ伏して泣きむせぶ背中を撫でる。
「そんなに泣くことはないだろう――体は感じているのに、な」
「う、あぁ、もういやぁ…」
「…はっきり言うようになったな。やっぱり前の方が可愛いか」
「御主人様の扇子は終わりました…けれど御主人様は約束を守って下さらない。るりを殺さなければならないのに…」
「じゃぁなんで俺の言うことを聞くんだ？」
「扇子でなくても、奴隷は人間に逆らえないのです」
男は枕を剥がして少女の体をひっくり返した。
「なぁるり、俺はお前の泣き顔、嫌いじゃないぜ？無表情よりずっといい。しかしそう嫌がられると無理矢理にでも悦ばせたくなっちまう」
「もう…もう厭です、御主人様…早くるりを終わりにして下さい…」
少女はぼろぼろと涙を溢した。
「そんなに俺が嫌いか、瑠璃。まぁ当然と言えば当然か」
「るりは嫌いと思っていません」
「じゃあどう思っているんだ？俺のこと」
「――今は、分かりません」
「今は？前はどうだったんだ？」
「るりは御主人様が好きでした」
「――何？」男は眉を顰めた。
「御主人様は、るりにとても優しくしてくれました。るりはもっと御主人様の役に立ちたいと思いました。幸せな扇子だったのです」
「だがお前は泣いていた」
「体の熱くなる度に何か心を持ってしまいそうで、涙で流していたのだと思います。るりは良い扇子でいて大事にされたかったのです。――けれど御主人様はるりのこと大事ではなかった」
少女はぎゅ、と自分の体を抱いた。
「大事ではなかったのです……」

「瑠璃…」彼は少女の頬をそっと両手で挟み黒い瞳で真直ぐに見つめた。
「――儀式だったんだ」苦しそうに息を吐く。
「お前の言う通り、本来婚儀前に扇子は殺さなければならない。だがその前夜には親しい友を招いて『扇子開き』が催される。最期の夜に客に振舞い儚い命を惜しみ、扇子は着飾り生涯最高の快を与えられて手折られる。――胸糞悪い悪習だ」
「俺が自由な男に見えるか？瑠璃。俺は貴族の誰より貴族の人形だ。この世に生を受けた時から俺の体は俺の物ではない。だが俺はこの霧崎の血に誇りを持つ。千年の先代もじじいや親父も自分の一番大事なものを捨ててでも守ってきた名だ。俺の代で途絶えさす訳には絶対にいかねぇ」
男は少女の細肩に手を置き頭を垂れる。
「許してくれ、瑠璃…」
「はい、御主人様……」
顔をあげると変わらず虚ろで哀しい空色の瞳が自分を映していた。

「光次郎」
「なんだ？」
「俺は奴隷制を撤廃する」
「へぇ…なんでまた」
「俺は瑠璃を妻にしたい。あいつだけを大事に愛でてぇ」
「はは、掟を破らない為に掟ごとを壊すのか。お前は本当に気の狂った男だよなぁ」
「俺の体は霧崎の為に、俺の命はあいつの為にある」

「お前の分はどこにある」
「俺の意志は俺の為にある」
「じゃ、俺の情はお前の為にある、てとこか。――付き合うぜ、どこまでも」
男は明けない夜の空を仰ぐ。
「あいつの笑顔を見たいんだ」

――この瑠璃色を透き通るような空色に変えて、きっとお前と見上げよう。

十八．瑠璃　【最終話】（後書き）

有難うございました。評価、感想頂けたら幸いです。

十九・空　【後書】

「御無沙汰しております、旦那様」
「ああ」
「まさか本当に奴隷制を撤廃してしまうとは…貴方は本当に凄い人だ」
「既にあちこち綻んでいたんだよ。少し糸を引っ張っただけだ。――と言っても、思ったより時間はかかっちまったがな」
「代償も大きかった…あちこちの戦火で多くの人が――特に奴隷はその半分以上が命を落としました。それに、制度自体は失くなったとはいえまだまだ差別は残るでしょう。大変なのはこれからです」
「まぁ、頑張れよ」
青年は苦笑する。
「本当に人使いの荒い人だ。やることだけをやってあとは人に押し付けてしまうとは」
「俺の目的はあいつと一緒になることでそれ以上でも以下でもないからな。いつまでもやっていたらあいつの一番美しい時期が終わっちまう」
「――るりは元気ですか」
「相変わらず寂しがり屋だぜ？早く帰って可愛がってやらないとな」
くすくすと男は笑う。
「俺が憎いか？竜」
「感謝しこそすれ怨む由縁はありませんよ。俺は結局なにもできなかった――いや、しなかった。彼女の幸せを願うだけの男です」
「まぁ会わせねぇとは言ってねぇよ。あいつも喜ぶ」
「いいんですか？」
「瑠璃は俺に惚れているからな、所詮お前は兄代わりだ」
男は何かを想い出すようにくすくすと上機嫌で笑う。
「――十分ですよ、兄で」

「ところで俺は隠居しようと思う」
「本当に唐突ですね。後継はどうするんですか？」
「お前だ」
「何を――」
「大丈夫だ、お前はじじぃの子だからな。これからの時代、霧崎にとっても俺のような奴よりお前の方がずっといいだろう」
「それが本当の隠居理由ですか？」
「まさか。瑠璃と一日中遊んでやる為に決まっているだろう」
「あなた程彼女を愛していなかったら俺も断ったかもしれません」
「何言ってるんだ？お前に拒否権はないぜ」
男は微笑した。
「お前の命は俺が預かっているんだからな」

「帰ったぜ、瑠璃」
「お帰りなさいませ、旦那様」
「瑠璃、結婚をしよう」
「はい、旦那様」
男はぐに、と女の頬を引っ張った。
「はい、じゃねぇよ、この」
「え、け、けれど…旦那様が」
「もっと喜ぶとか何か反応しろ」
「――はい」
女はぎゅ、と彼の腰に抱きつく。
「るりはとても嬉しいです、旦那様。るりは旦那様がとても好きです」
「よしよし、いい子だ」
男は女の頭を撫でた。彼女は気持ち良さそうな顔をした。男は女を離し、もう一度顔を見た。

「お前は世界の何よりも美しい」
女は薄く頬を染め、男は抱きしめた。
「この空の瞳も月の髪も桜の唇も…全てを俺のものにしたい」
淡空の瞳に黒い眼差しが差す。
「俺はお前を愛している。お前一人をずっと大事にする。だから、俺の妻になってくれ」
女も遠慮がちに、それでもぎゅ、と手を背に回した。
「はい、旦那様…るりも、愛しています。旦那様と一緒はとても幸せです。るりは旦那様の役に立ってずっと大事にされたいです」
「俺のものになるか？瑠璃」
くすくすと言うのが聞こえて男は驚き女を離す。
「旦那様に出会った時からずっと、るりは全て旦那様のものです」
女の顔を見て呆気に取られた。
「なんだ、呆気なく笑うなぁ。俺がこの顔を見る為にどれだけ血を流させたと思っているんだ」
それはとても自然で、今迄それが無かったのが返って不思議であった。
「可愛いなぁ、可愛い。なんて可愛いんだ」
「るりは上等なのです」
女は花のように笑った。

「今日は一段と空が綺麗だな、瑠璃」
「はい、千次様」

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2897m/

瑠璃色の奴隷

2011年7月26日17時26分発行